

原油価格は需給改善から安定基調へ ～生産コントロールと経済成長が後押し～

昨年2月に原油価格が1バレル30米ドルを割り込むなど、原油価格は需給悪化から値下がりがりましたが、その後は戻り歩調にあるようです。そこで、足元の需給の状況などを確認してみることになります。

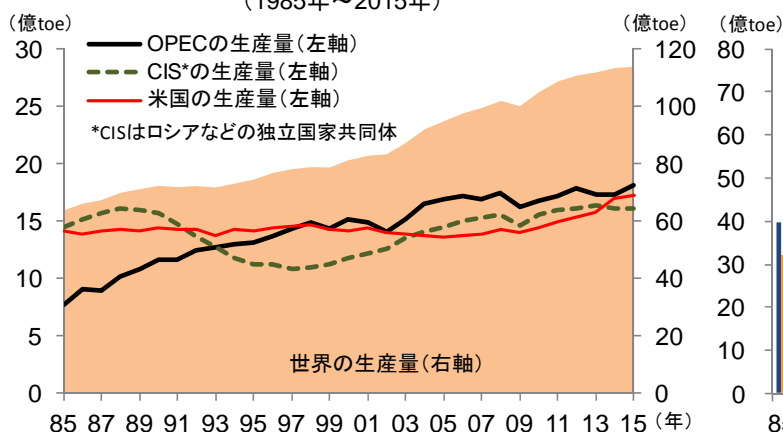
はじめに、供給動向についてみてみます。2000年代後半から、米国のシェールオイルの生産が急拡大したことを受け、OPEC(石油輸出国機構)はシェア確保を目的として増産を行なったため、供給量が急増し、結果として原油価格は大幅に下落しました。その後、価格低下により相対的に採掘コストの高いシェールオイルは減産せざるを得なくなり、さらに、2017年からはOPEC加盟国やロシアなど非加盟国が協調減産を開始したことにより、供給調整が進みました。一方、供給調整が進み価格の上昇が大きくなれば、再び米国のシェールオイル生産の拡大につながる可能性は高くなるものの、民間企業であることから、採算割れに陥ってまで無理な生産は行なわれなれないと思われれます。このように、今後も生産量が適切にコントロールされていくとみられます。

次に、需要動向についてみてみます。一般に経済成長とともに原油を含むエネルギー資源の消費は拡大するといわれています。IMF(国際通貨基金)は2017年の世界の経済成長率予測を3.4%増とし、新興国の4.5%増(先進国は1.9%増)がけん引役になるとしています。経済の成熟期に入り安定成長を続ける先進国が、技術革新によるエネルギー効率向上などでエネルギー資源の消費抑制を進める一方で、新興国はかつての先進国のように、高い経済成長と生活水準の向上を早期に達成するために、エネルギー資源の消費を拡大させていくとみられます。事実、世界のエネルギー消費量の推移をみると、新興国は2005年に先進国を上回り、増加基調が続いています。このように、経済成長とともに原油を含むエネルギー資源の消費は拡大していくとみられます。

以上のことから、供給が適切にコントロールされ、新興国の高い成長に伴ないエネルギー資源に対する需要が拡大することにより、需給改善が続く、エネルギー価格、中でも原油価格は安定基調が続くと期待されます。

世界のエネルギー生産量の推移

(1985年～2015年)



注)生産量は、石油・天然ガス・石炭の合計値を使用しています。

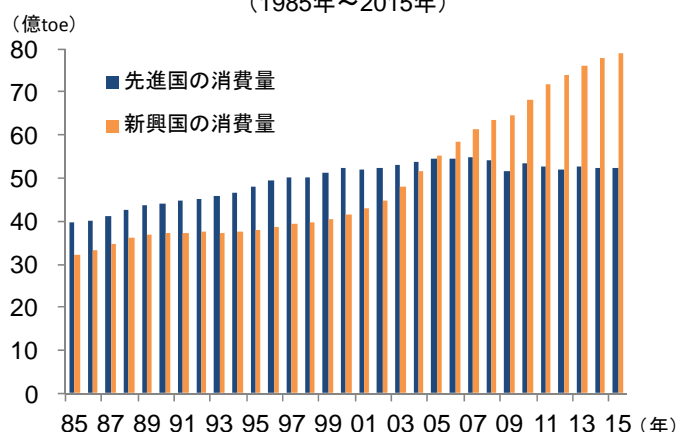
※toeは、石油換算トンを示しています。

(BP「BP Statistical Review of World Energy June 2016」をもとに日興アセットマネジメントが作成)

上記は過去のものであり、将来を約束するものではありません。

世界のエネルギー消費量の推移

(1985年～2015年)



注)先進国と新興国は、BPのデータをIMFの定義に基づいて集計しています。